

# 紫式部日記の文体

—助動詞・助詞の連結から見た—

宇都宮 睦 男

紫式部日記の文体を解明するには、いろいろな方法があると思われるが、ここでは、助動詞・助詞相互の連結関係を取りあげた。

助動詞と助詞とは、相互に種々な連結が可能であるが、ある作品が、その中から、どのような連結を選んで表現されているかということによって、その作品の文体の特性の一面を明らかにすることが出来ると考えられるからである。

このような助動詞・助詞の連結を扱われた最初は築島裕氏である。氏は、その著「平安時代の漢文訓読語につきての研究」において、漢文訓読語と和文脈の言語との間に存する相違点を明らかにするために、まず、訓読語の代表として興福寺蔵本大慈恩寺三蔵法師伝古点を、和文脈語の代表として源氏物語、伊勢物語、土佐日記を選んで、それらの助動詞・助詞の連結を調査されたのである。それによって明らかになっ

た点は、次のようなことである。

(1) 訓読語における連結の「異なり語数」は、仮名文学作品よりも少い。

(2) 何語連結が、連結総数の何%を占めるかという点を調べて見ると、慈恩伝古点、伊勢物語、土佐日記は、大体、類似の分布を示し、二語連結が五五%、六〇%で最高である。これに対して、源氏物語だけは、特異な分布を示して三語連結が最高で、約四五%を占め、六語連結まで存し、源氏物語の文体の特異性を示している。

(3) 慈恩伝古点にあって源氏物語にない連結は、大体において、訓読語特有の語形を示している。

(4) この四文献の間の、語連結の重複の（又は重複しない）数は、ほぼ平安時代における使用種類の上限と見てよい。また慈恩伝古点と源氏に共通するものは、この時代における言はば最大公約数的な、基本的な種類である。

(5)伊勢物語のみ、土佐日記のみにある連結の一覧と、各文獻相互間に共通する連結の種類の数を表示された。

なお、氏は第二表を説明された所で、「紫式部日記につき同様の調査をして、(2)の結果と比べれば興味深いであろう」と述べていられる。本調査も、これに刺激されて行なったのであって、説明の順序も、氏の示された六つの表に、紫式部日記の場合を加えて行き、出来ることならば、これらの諸作品、特に源氏語と比較することによって、紫式部日記の連結の性格を明らかにしたいと思うのである。

さて、紫式部日記には、どのような連結が用いられているかを調べると、第一表のようになる。また、それについて、第二表のような数値を得た。調査にあたっては、築島氏の定められた基準に従って行なった。即ち、基準の大体は次のようである。

一、シテは一語連結とする。

二、シモ、モノヲ、モノカラは二語連結とする。

三、ナメリとナンメリのように、撥音を表記した例と省記した例との併存するものは、同一種とする。

四、ベクモ、ベウモのように、音便形とその原形とが併存するものは別種とする。

五、「ナリ」「ナリト」「ナリナド」は「ナリ」一種として扱う。

六、ル、ラル、ス、サス、シム、タマフ、タテマツル、キ

コユ、ゴトシ、ハベリは調査の対象にしない。

第一表 紫式部日記の助動詞・助詞相互の連結一覧(×は源氏物語に見られないもの)

#### △一語連結

なり(断定)なる(断定)なれ(断定)ずぬ(打消)きし(しか)けり(ける)けれぬ(完了)ぬる(つ)つる(たり)たる(りる)むめらむ(けむ)べし(べき)べい(べけれ)めり(める)めれ(まし)じ(まじく)まじ(まじき)まほ(まほしう)まほ(まほしき)が(の)に(を)へ(と)から(より)して(だに)さ(へ)のみ(ばかり)まで(ながら)など(つつ)ば(未然形接続)ば(已然形接続)ども(とも)て(で)は(も)ぞ(や(係助詞)か(係助詞)なむ(係助詞)こそ(なむ(終助詞)や(終助詞)よし(強意)かし(かな

#### △二語連結

(以上七四種)

なら(じ)なら(ず)なら(ぬ)なら(む)なら(め)なり(か)し(なり)けむ(なり)けり(なり)ける(なり)し(なり)しか(なり)や(なる)が(なる)ぞ(なる)べし(なる)に(なる)は(な)めり(なん)める(な)めれ(なる)も(なる)や(なる)を(なる)らむ(なれ)ども(なれ)ば(ず)かし(ず)とも(ず)ながら(ず)も(×)ず(だに)ぬ(か)ぬ(かな

ぬーこそ ぬーに ぬーは ぬーまで ぬーや ぬーど  
 ねーば ざりーき ざりーけり ざりーける ざりーし  
 ざーなる ざるーべし ×ざーめれ しーが しーかな  
 しーに しーは しーも しーぞ しーを しーかど  
 しかーども しかーば けるーかな けるーに けるーも  
 けるーを けれーど けれーば なーばや なーむ  
 にーけり にーける にーし にーたり にーたる  
 ぬーべき ぬーべし ぬるーを ぬれーど ぬれーば  
 つーべう つーべき つーべく つーらむ つるーに  
 つるーは つれーど つれーば てーけり てーば  
 てーむ てーまし たらーず たらーむ たらーば  
 たりーけむ たりーける たりーし たるーが たるーぞ  
 たるーこそ たるーなり たるーに たるーは  
 たんーめり たるーも たるーを たれーば りーけり  
 るーかな るーぞ るーに るーも るーを るーば  
 むーかし むーぞ むーに むーの むーは むーも  
 むーよ ×うずーめる らむーを けむーかし べくーも  
 べうーも べきーかな べきーぞ べきーは べけれーど  
 べけれーば べかりーけれ べかーなる べかーめり  
 べかーめる べかーめれ めりーし めるーかし  
 ×めるーよ じーを まじけれーば のーは ×のーよ  
 ×のーぞ にーこそ にーさへ にーし にーして  
 にーぞ にーだに にーて にーなむ にーは にーも

にーや をーか をーこそ をーさへ をーし をーぞ  
 をーだに をーなむ をーば をーも をーや  
 ×をーして へーは とーか とーぞ とーだに とーて  
 とーなむ とーの とーのみ とーは とーばかり  
 とーも とーや ×とーまで ×とーして からーに  
 よりーは よりーも してーも さへーぞ のみーこそ  
 のみーぞ ×のみーして ばかりーに ばかりーの  
 ばかりーや ばかりーより ばかりーを  
 ×ばかりーなり までーぞ までーは までーも  
 ながらーこそ ながらーぞ ながらーの などーこそ  
 などーさへ などーして などーぞ などーだに  
 などーに などーの などーは などーも などーや  
 などーを ば(已然形接続)ーこそ てーこそ てーぞ  
 てーなん てーのみ てーは てーも ぞーかし ぞーや  
 ぞーは やーは かーは こそーは しーも ものーか  
 ものーから ものーを

△三語連結

ならーぬーを ならーずーのみ ならーましかーば  
 ならーずーぞ ならーしーを ×なりーしーなむ  
 ×なりーしーが なりーけむーかし なりーけれーば  
 なーめれーば ずーもーがな ざりーけれーば  
 ×ざりーしーなむ ぬーものーから ぬーものーを

(以上 二二五種)

ぬにーや にーけるも にーければ にーしかば  
 にーたるこそ にーたるに ×つべかめり  
 ×つべくぞ たらむこそ たらむは  
 たらむも たらむが たりけるを  
 たりしかば たりしこそ たりしは  
 たりしを たなれば ×たるよりも  
 ×たるにーはりしを るなりけり  
 るなるべし るなめり るにーや  
 むからに ×けむやーは べかめるも  
 べかめるを べかめれば ×べきならず  
 べきにーも ×なり(伝聞) ーつるは  
 ×まじきにーも にーこそは にーても  
 にーてだに にーしも にーては  
 にーてこそ にーてぞ にーやは をかーは  
 とーても ×とにーか とにーや とーやは  
 ×とまでは からにーや からなりけり  
 ばかりなれど などにーは などーをーば  
 ばにーや てしーも

△四語連結

×ならざるものーを ×ならぬものーから  
 なれーばにーや ×ぬばかりぞーかし  
 なましものーを ×なむーをーや  
 にーけるにーや ぬべかめれば  
 ×ぬれーばにーや ×たるをーしも

(以上 七〇種)

第二表 助動詞・助詞の相互連結の異なり語数

| 文献名      | 言語量   | 1語連結         | 2語連結          | 3語連結          | 4語連結          | 5語連結        | 6語連結       | 計               |
|----------|-------|--------------|---------------|---------------|---------------|-------------|------------|-----------------|
| (1)慈恩伝古点 | 約400  | 52<br>(27.4) | 115<br>(60.5) | 18<br>(9.5)   | 5<br>(2.6)    | 0<br>—      | 0<br>—     | 190<br>(100.0)  |
| (2)源氏物語  | 約2000 | 108<br>(5.5) | 719<br>(36.5) | 881<br>(44.7) | 239<br>(12.1) | 21<br>(1.1) | 1<br>(0.1) | 1969<br>(100.0) |
| (3)伊勢物語  | 59    | 89<br>(23.9) | 207<br>(55.5) | 71<br>(19.0)  | 6<br>(1.6)    | 0<br>—      | 0<br>—     | 373<br>(100.0)  |
| (4)土佐日記  | 29    | 65<br>(28.1) | 120<br>(56.3) | 34<br>(14.8)  | 2<br>(0.9)    | 0<br>—      | 0<br>—     | 231<br>(100.0)  |
| (5)紫式部日記 | 67    | 74<br>(19.8) | 225<br>(58.6) | 70<br>(18.2)  | 14<br>(3.6)   | 1<br>(0.3)  | 0<br>—     | 384<br>(100.0)  |

(注) 1、( )内の数字は比率(%)をあらわす。

2、言語量とは、日本古典文学大系本の頁数である。

△五語連結

るなんめりかし  
 にーてしーも ×ばかりにーぞーかし  
 ×なるにーしーもこそ

(以上 一四種)

これらによると、紫式部日記は、伊勢物語、土佐日記と同じような言語量で、連結の「異なり語数」も、ほぼ、これらに等しい。また第二表から連結の分布状態を見ると、紫式部日記は、二語連結が五八・五%で最高で、この点でも、伊勢物語、土佐日記、慈恩伝古点と、大体において類似の分布を示している。しかし、一語連結と、三語以上を一括した連結とは、紫式部日記の場合、夫々一九・三%と二二・一%で、他の作品に比して、より源氏に近い分布を示している。

次に、紫式部日記にあって、源氏物語にない連結を調べると、第三表のようになる。

第三表 紫式部日記にあって源氏物語にない連結

ずーだに ぎーめれ うずーめる めるーよ のーよ  
 のーぞ をーして とーまで とーして のみーして  
 ばかりーなり なりーしーなむ なりーしーが  
 ざりーしーなむ つーべかーめり つーべくーそ  
 たるーよりーも たるーにーは けむーやーは  
 まじきーにーも とーにーか とーまでーは  
 なり(伝聞)ーつるーは べきーならーず  
 ならーざるーものーを ならーぬーものーから  
 ぬーばかりーぞーかし なーむーをーや  
 ぬれーばーにーや たるーをーしーも  
 ばかりーにーぞーかし なるーにーしーもーこそ

(以上 三二種)

第四表 共通する連結語の数

| 文献間     | n語連結の共通数 |     |    |   |     | C    |      |      |      |      |
|---------|----------|-----|----|---|-----|------|------|------|------|------|
|         | 1        | 2   | 3  | 4 | 計   | 1    | 2    | 3    | 4    | 全    |
| (1)~(2) | 43       | 86  | 4  | 1 | 134 | .368 | .115 | .004 | .004 | .066 |
| 〃~(3)   | 42       | 53  | 0  | 0 | 95  | .424 | .197 | 0    | 0    | .203 |
| 〃~(4)   | 39       | 38  | 0  | 0 | 77  | .500 | .187 | 0    | 0    | .224 |
| 〃~(5)   | 42       | 53  | 0  | 0 | 95  | .500 | .185 | 0    | 0    | .198 |
| (2)~(3) | 83       | 181 | 69 | 3 | 336 | .728 | .243 | .078 | .012 | .167 |
| 〃~(4)   | 63       | 118 | 29 | 0 | 210 | .573 | .161 | .033 | 0    | .106 |
| 〃~(5)   | 74       | 214 | 57 | 7 | 352 | .685 | .293 | .064 | .028 | .176 |
| (3)~(4) | 60       | 83  | 10 | 0 | 153 | .638 | .327 | .105 | 0    | .339 |
| 〃~(5)   | 66       | 110 | 13 | 1 | 190 | .680 | .342 | .102 | .050 | .337 |
| (4)~(5) | 57       | 78  | 8  | 0 | 143 | .695 | .278 | .083 | 0    | .302 |

(注) 1、文献番号は、第二表に同じである。

2、C欄の数値は、築島氏の適用された式によって出しており、例えば、(2)と(5)の計については、

$$C = \frac{x}{a+b-x} = \frac{352}{1969+384-352} = \frac{352}{2001} = 0.1759$$

この三二種のみが、源氏物語に見られないのであって、他の三五二種は、全て源氏にも存在するのである。

更に、源氏のみならず、他の慈恩伝古点、伊勢物語、土佐日記にもなく、紫式部日記のみにある連結は、第三表から「をーして」「とーして」「のみーして」を除いた他の全てである。

最後に、紫式部日記を加えて、各文献相互間に共通する連結の種類の数を示すと、第四表のようになる。

ところで、一般に、共通の度合が、高ければ高いほど、Cは一に近くなるべきものとすると、紫式部日記と源氏物語との場合のように、連結の「異なり語数」が相違するときは、たとえ、すべての連結が一致したとしても、

$$C = \frac{384}{1969+384-384} = \frac{384}{1969} = 0.1950$$

となって、非常に低い値しか得られない。従って、この結果と、紫式部日記と源氏以外の他の作品との間の同様な計算によって出されたCの値とを比較して、紫式部日記との共通の度合について判断を下すのは、多分に危険が伴う。

従って、この式は、両作品の連結の異なり数が一致するか、又は殆ど近似する場合にのみ有効であると言えよう。

それでは、どういう方法が良いかと考えるに、単純な方法ではあるが、紫式部日記の連結の「異なり語数」のうち、何%が、源氏に共通するかを見るのがよいと思う。すると、

$$\frac{352}{384} = 0.9166$$

となる。同様にして、他の作品の場合も調べると、次のようになる。

第五表 源氏物語との共通度 (%)

|         |      |
|---------|------|
| (2)~(1) | 70.5 |
| 〃~(3)   | 90.1 |
| 〃~(4)   | 90.9 |
| 〃~(5)   | 91.7 |

(注) 第四表の計について調べた。

これからすると、やはり、紫式部日記は、他の作品に比べて、源氏物語との共通の度合が最も高いことがわかる。

ところで、紫式部日記のみに見られて、源氏その他に見られない連結は、前にも述べたように二九種あるが、その中で、

○宰相の君は、北野の三位のーよ、ふくらかに、いとやうだいまめかしよう、かどかどしきかたちしたる人の、(古典文学大系四八六べ)

○舞姫どもの、いかにくるしからむと見ゆるに、尾張の守のーぞ、心地あしがりていぬる(同四七九べ)

などは、前者は、挿入句で、宰相の君を説明しているのであって、「北野の三位の娘よ」ともいえるところであり、後者は、「尾張の守の舞姫ぞ」の省略とも見られるところであって、共に簡潔に叙述されたものと見られる。このような叙述態度は、文中に、体言止めや、自立語のみで文を終止する場合が多いことなどにつながるものである。

そして、このような点は、源氏物語に対して、紫式部日記の文体の特性を示すものであり、ひいては、日記文体の特性でもあるといえよう。

その他の特有連結は、「よ」「ぞ」「し」「も」「ばかり」「かし」「を」などの副助詞や感動助詞、また「めり」「つ」「ぬ」（共に確認）などの助動詞が、二語、三語と連結して形成されているようである。

従って、これらの特有連結は、どのような場面にどのような使われているかを見ることによって、紫式部日記の文体の特性に触ることができるように思う。

(昭和三九・九・二三)

(付) 本稿は、八月五日、広島大学国語教育学会に発表されたものを、大巾に改正したものである。特に清瀬良一氏、山内洋一郎氏から御教示を賜りましたので、深く感謝いたします。

(海上自衛隊第一術科学校教諭)